

The cover features a background of vertical gray stripes. The title is centered and reads "KIT Stakeholder Exchange Meeting Report".

**KIT**  
**ステークホルダー**  
**交流会**

**報告書**

平成24年3月  
**金沢工業大学**

K I Tステークスホルダー交流会 報告書

目 次

はじめに	2
スケジュール	3
参加学生	4
ステークスホルダー交流会	
開会挨拶	6
交流会の趣旨説明	7
学生によるプレゼンテーション	8
学生へのフィードバックコメントまとめ	24
パネルディスカッション	26
参加者名簿（企業・学校）	34
参考資料	

## はじめに

近年は、組織の永続的な発展にグローバルな視点を有する若手人材の確保が不可欠となり、大学に求められる役割はより重要になっています。そこで、「自ら考え行動する技術者」を教育目標とする本学の“社会的貢献”を産業界に提示し、企業や地域社会の方々に学生の成長の軌跡を直に確認してもらう「KITステークホルダー交流会」を開催しました。

ステークホルダー（企業や地域社会など）との交流を促進するため、教学経営への取り組みや産学連携・地域連携による教育プロジェクトをテーマに、大学側から積極的に情報を発信し、教育成果を公表すると共にいわゆるアドミッションポリシー（入学者受け入れの方針）、カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）、ディプロマポリシー（学位授与の方針）をステークホルダーの方々に提示することが可能となります。また、交流会を通じて、学生は社会で活躍する人材と直接的な接点を持つことが出来るようになり、そこから生まれるコミュニケーションは、自らの成長や今後のキャンパスライフにおける新たな気付きをもたらします。

今回の交流会では、学内外から集まった約50名の出席者の前で、学生が自身の学生生活を振り返り、発表やポスターセッションを通じて、自らの成長をプレゼンテーションしました。また、産学連携による人材育成をテーマとし、製造・ITビジネス関連の企業代表者と本学教職員らによるパネルディスカッションを行ないました。当日は、地元のFM放送局で番組制作に取り組む学生団体のメンバーが、インターネットの動画共有サービス「Ustream」を利用して、会場の模様を中継配信しました。

# KITステークホルダー交流会 スケジュール

平成 24 年 2 月 14 日(火) 15:00~18:00  
金沢工業大学 扇が丘キャンパス 7 号館 2 階 204 教室

---

15:00	開会挨拶	学長	石川 憲一
	交流会の主旨説明	教務部長	佐藤 恵一

---

15:10 学生によるプレゼンテーション (各発表 5 分・質疑応答)

①工学部	情報通信工学科	1 年	三上 智徳
②工学部	ロボティクス学科	2 年	島 克実
③情報学部	情報工学科	2 年	由良 研人
④工学部	機械工学科	3 年	櫻井 瑞穂
⑤工学部	ロボティクス学科	3 年	牧本 健太郎

---

15:50 ポスターセッション

---

16:30 学生によるプレゼンテーション (各発表 5 分・質疑応答)

⑥工学部	航空システム工学科	3 年	木村 久幸
⑦工学部	情報工学科	3 年	飯嶋 大地
⑧情報学部	心理情報学科	3 年	水野 智章
⑨情報学部	心理情報学科	3 年	西川 雄一郎

---

17:00 パネルディスカッション

テーマ: 金沢工業大学の教育に対する期待・要望 産学連携によるグローバル人材育成に向けて

パネリスト	平松産業株式会社 取締役・総務部部长	梅川 三樹男氏
	サイバーステーション株式会社 代表取締役社長	福永 泰男氏
	株式会社アイグロー 代表取締役 CEO	児玉 知浩氏
	金沢工業大学 副学長 (産学連携教育担当)	山部 昌
モデレーター	金沢工業大学 産学連携推進部 連携推進室 室長	福田 崇之

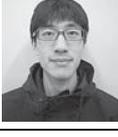
---

18:00 終了

---

## 参加学生

**P** : プレゼンテーション担当

1	工学部 情報通信工学科 1年	ミカミ トモノリ <b>三上 智徳</b>	<b>P</b>		自分の興味関心があることを人に伝えられるように努力しています。
2	情報学部 メディア情報学科 1年	モロエ ダイスケ <b>諸江 大輔</b>			今回の KIT ステークホルダー交流会では私の過去の経験から将来の展望について熱くPRさせてもらっています。
3	バイオ・化学部 応用化学科 1年	ミヤケ フウタ <b>三宅 風太</b>			小学校の頃から夢はエンジニアです。WAVE プロジェクトの活動を始めて気づけたことは『伝わること』です。
4	工学部 機械工学科 2年	タケイ シュンタロウ <b>竹井 駿太郎</b>			私は将来「ものづくり」の場で商品の企画・設計をしたいです。あがり症ですが精一杯話すので、聞いて下さい。
5	工学部 ロボティクス学科 2年	シマ カツミ <b>島 克実</b>	<b>P</b>		お目汚しにはなるとは思いますが、頑張る情熱と夢を持っていると自負している者の自己PRです。ぜひ見ていってください。
6	工学部 航空システム工学科 2年	オオハシ リツキ <b>大橋 立暉</b>			香川県出身 飛行機が好きで、飛行機の専門分野を中心に勉強をしています。飛行機の知識は負けません。
7	工学部 電気電子工学科 2年	クドウ タイガ <b>工藤 大河</b>			初めて自己PR 考えて悪戦苦闘しながらなんとか形にすることができました。
8	工学部 電気電子工学科 2年	ハシモト カズアキ <b>橋本 和堯</b>			今回の自己PR 講習を通して自分を見つめ直すことができました。今の自分がどんな人物であるか精一杯伝えます。
9	情報学部 メディア情報学科 2年	ヒラハラ コウセイ <b>平原 恒星</b>			今まで自らについて振り返ることがなかったのですが、この機会に真剣に考えました。自らをPR できるようがんばります。
10	情報学部 心理情報学科 2年	サカイ シュン <b>酒井 駿</b>			現在、学友会という組織の中で、台湾の大学と定期国際交流を行う等、異文化交流を主に活動しています。
11	情報学部 情報工学科 2年	ユラ ケント <b>由良 研人</b>	<b>P</b>		情報セキュリティ専門家を目指しています。プロジェクト活動で Android アプリケーションを開発しています。
12	バイオ・化学部 応用バイオ学科 2年	スギヤマ ナオヒサ <b>杉山 尚玖</b>			私は、話すのが好きな人間です。いつも、前向きな姿勢で、物事に取り組みます。

13	工学部 機械工学科 3年	サクライ ミズホ <b>櫻井 瑞穂</b>		ものづくりには知識や技術に加えコミュニケーションが重要だと考え、学内インターンシップ等で能力向上を図っています。
14	工学部 ロボティクス学科 3年	マキモト ケンタロウ <b>牧本 健太郎</b>		「RoboCup プロジェクト」に参加、ロボットの行動を判断するプログラムの作成を担当、現在は就職活動中。
15	工学部 航空システム工学科 3年	キムラ ヒサクキ <b>木村 久幸</b>		将来、航空機の設計に携わる仕事がしたいと考えています。そのために、大学では航空工学を学んでいます。
16	工学部 情報工学科 3年	イイジマ ダイチ <b>飯嶋 大地</b>		学生によるシステム開発チームの代表を努め、先端のICTを駆使し新しい価値を産み出す活動をしています。
17	情報学部 メディア情報学科 3年	コバヤシ トモヒロ <b>小林 智大</b>		私はどんな時でも人生を楽しめる人間です。今はゲーム作りでその才能を生かそうと精進しています。
18	情報学部 心理情報学科 3年	ミズノ トモアキ <b>水野 智章</b>		私は困難に積極的に立ち向かい、最後までやり遂げることができます。
19	情報学部 心理情報学科 3年	ニシカワ ユウイチロウ <b>西川 雄一郎</b>		長所は積極性です。留学の経験を生かして、どんなことにもチャレンジしていきます。よろしくお願ひします。
20	情報学部 心理情報学科 3年	サトウ エイタ <b>佐藤 英太</b>		私はコミュニケーション能力を向上させたいと考え、今回のプログラムに参加を希望しました。
21	情報学部 心理情報学科 3年	オカダ トモアキ <b>岡田 知明</b>		私は現在企業との共同研究を、学科内のチームで行っています。そのチーム活動を通して、協調性を学びました。
22	バイオ・化学部 応用化学科 3年	ドウシチ キエ <b>堂七 基恵</b>		私には、大学時代に資格取得のために最後まで諦めずに勉強した経験から粘り強さがあると言えます。
23	工学研究科 機械工学専攻 1年	スズキ ヒデヤ <b>鈴木 秀矢</b>		私の人生は自動車と共にあると考えています。そして、学生生活と趣味を通じて大きく成長できたと思います。

USTREAM LIVE 配信 メインパ ソナリティ		情報学部 メディア情報学科2年 オク アイリ <b>奥 愛里</b>		情報学部 メディア情報学科1年 マキノ トモキ <b>牧野 友紀</b>
----------------------------------	---	---	--	---

## 開会挨拶

金沢工業大学学長 石川 憲一

本日は、昨年に引き続き第2回目のKITステークホルダー交流会を開催したところ、地元をはじめ大変多くの方々にご参加いただきまして、心から感謝申し上げるとともに、歓迎申し上げます。

本交流会は、後ほど佐藤教務部長からご説明しますが、本学が推進してきた学部教育における正課教育、ならびに正課外教育を通じて得られる学力×人間力を向上させて、自ら考え行動する技術者に成長していくプロセスをご理解いただく機会としています。



従来は4年次に行われるプロジェクトデザインⅢ、ならびに夢考房プロジェクト発表会に見られますように、学生の1年間の成果、あるいは活動成果をご覧いただき、ご質問やご意見をいただいております。今回の交流会では23名の学生が参加し、その中の9名の学生によるプレゼンテーションが5分間の発表と3分間の質疑応答によって行われます。従来との根本的な相違点は、今回、1年次の学生が1名、2年次の学生が2名、3年次の学生が6名のプレゼンテーションが用意され、学年ごとの成長ぶりがご覧いただけるようになっているところです。またポスターセッションもこの前にありますので、ご高覧を賜れば幸いです。

また、学生諸君のプレゼンテーションの終了の後、「金沢工業大学の教育に対する期待と要望」と題するパネルディスカッションがあります。パネリストには平松産業株式会社取締役・総務部部长、梅川三樹男氏、サイバーステーション株式会社代表取締役社長、福永泰男氏、株式会社アイグロー代表取締役CEO、児玉知浩氏に本学産学連携支援担当、山部副学長が加わり、本学産学連携推進部、福田崇之室長のモデレーター、司会によって議論を進めさせていただきます。

なお本交流会では、今回ご参加いただけない方々にもお聞きいただくために、USTREAMによるライブ配信が本学メディア情報学科の2名の学生のパーソナリティーによって行われております。

最後になりましたが、6時までこの交流会は開催させていただきますので、活発な意見交換を行っていただき、本交流会を盛り上げていただくことをお願い申し上げます。開会のあいさつとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## 交流会の趣旨説明

金沢工業大学教務部長 佐藤 恵一

私の方からは、少し細かいことについて皆さまにお願いしたいことを交えて、一言ごあいさつを申し上げたいと思います。

このKITステークホルダー交流会は「学生の成長支援型IRシステムの構築」というテーマで、いわゆる文科省のGPの取り組みとして認められたものの一環です。学生がいかに成長していくのかをわれわれはずっとウォッチングしているのですが、やはりわれわれ内部だけの学生たちへのウォッチングでは、なかなか分からないところがあります。ここにお集まりいただいた皆さま方からいろいろな意見をいただき、それをさらにフィードバックして、それをまた教育に代えていきたいという趣旨があります。



お手元のパンフレットには、「学部教育」ということで、高校から入ってきて、右側にかけて、社会に出て行く流れが書いてあります。本学の教育目標は、自ら考え行動する技術者を育成するというものです。そのために、プロジェクトデザイン教育という仕組みを中心として、基礎教育や専門教育を行っていくという教育のプログラムを組んであります。

それと同時に、夢考房プロジェクトに代表されるような、いろいろな課外活動があります。そういうものを絡めて、学生たちになるべく多くの力を付けていってほしいという教育をしているわけです。

そこにある「総合力」とは、いわゆる基礎的な力と専門の力から成る学力をしっかりと身に付けてもらうと同時に、人間力を伸ばしてもらおうということです。人間力と言っても漠然とした力ではなくて、社会で活躍できる力、簡単に例を挙げれば、いわゆるコミュニケーション力とかチーム活動をする力、あるいはその一環としてのリーダーシップ、プレゼンテーション力など、いろいろな力も授業や課外活動をとおして付けていくということです。そして、そういう学力と人間力を一緒に絡めていく。決して学力をおろそかにするわけではなく、学力を付けながら人間力をも同時に付けたいという教育を展開しております。

今日は各学科から希望者を募って、学生諸君にプレゼンテーションをしていただくわけですが、恐らく学業成績もさまざまな学生たちだと思います。大学に入る以前の個人的な力も大きいかもしれませんが、やはり金沢工業大学というアカデミアの中で育てているわけです。そこで培われた彼らの成果を見ていただき、皆さまからいろいろなご意見をいただきたいと思います。学生個人に対するご意見でも結構ですが、われわれ教育のプログラムに携わっている者たちへのいろいろなご意見、コメントがいただけたら非常にありがたいと思います。やはり何よりも大事なことは学生中心の大学ということです。学生を成長させるようないろいろなご意見、コメントがいただけたら非常にありがたいと思います。

6時まで3時間の間、どうぞよろしく申し上げます。

## 学生によるプレゼンテーション

工学部情報通信工学科1年 三上 智徳



私は情報通信工学科1年の三上智徳です。本日はよろしく申し上げます。今回は私の強みと目標についてPRさせていただきます。

私は高校生のころからセールスエンジニアという職業に就きたいと思っていました。セールスエンジニアとは技術者と販売員を合わせたような職業なのですが、これになりたいと思った理由は、私が作ったもの、あるいは会

社が作ったものを自らの手で販売することで、直接顧客と話すことができるので、やりがいがあるのではないかと考えたからです。

しかし私は、高校生のとき少数の友達としか話していなかったため、人前で話す能力などを身に付けてきませんでした。それで、セールスエンジニアに必要な能力を身に付けるために、この大学に入ってからさまざまな経験をしてきました。今回は大きく分けて二つの経験について話したいと思います。

一つ目は、プロジェクトデザインという金沢工業大学独自の科目があります。プロジェクトデザインではチームで一つのテーマに取り組むもので、世の中をより良くしていくために何が必要かを自分たちで考えていく科目です。私たちはこの中で災害時の仮設トイレの改善をプロジェクトテーマとして取り組んできました。これは去年の3月にあった大震災で仮設トイレが足りなかったというニュースを見たからです。

水も電気も使えない場面で、さらに臭いなどでストレスを感じるトイレは嫌なので、こういうことにも気を遣いました。さらに、震災直後だと大きい重機などは道路を通ることができないので、非常にコンパクトなものでなければなりません。この課題を解決するために私たちが考えたのは、下水道のマンホールに排泄物を流すというものです。

これを作っている過程で、私たちはチームでさまざまな能力を身に付けました。チームで一体になって事に当たる能力です。また、コミュニケーションを取りながら、一つのものを作る楽しさなどを身に付けました。

もう一つの経験は、WAVEプロジェクトに参加したことです。WAVEプロジェクトとはインターネットでも聞くことができるFMのコミュニティーラジオなのですが、これを金沢工業大学の学生が制作しているのです。私はラジオ番組の制作をとおして、自分の知っていることや伝えたいことを人に話すことができる能力が身に付くのではないかと考え、これに参加しました。

最初は先輩方のラジオ番組を聴いて勉強していたのですが、自分の番組を作る段階になって、どういうものを作ればいいのかと考えました。私は高校生のころから文房具をたくさん集めていたので、ここでは文房具について話すことにしました。最初、文房具の番組を制作して幾つか放送したのですが、聴いている方、あるいは先輩から、「この番組はつまらない」「説明が長過ぎて面白くない」と言われました。ラジオは声だけのメディアなので、映像を見せて発表することができません。そこで私が考えたのは、学生を対象にアンケートを取ったり、実際にインタビューをしたりして、みんなが使っている文房具を調べ、テーマを作ってトークを中心とした番組にすることです。そうすることで興味を持ってもらえるし、情報が少ないので自分が本当に話したいことだけを強調して言えるようになりました。

次に、私の今後の課題として、セールスエンジニアになるにはほかにどんなスキルが必要かを調べて、そのスキルを身に付けるために何をすべきかを考えました。セールスエンジニアに必要なだと私が今考えるスキルは、スライドに挙げたようなものです。今後はこのようなスキルを身に付けるため、考えて行動していきたいと思います。

## 【質疑応答】

(質問) 三上さん、本当にお疲れさまでした。トップバッターということで、緊張もたくさんなされていたということですが、最後に出ている今後の課題の中に、売り込むためのコミュニケーション能力があると思います。例えば今ラジオのお話が出たと思うのですが、この文房具をテーマにして、誰に何を聞いてもらいたかったのかが詳しく出ていなかったように思います。ここはすごくコミュニケーションに非常に大事になってくる場所ではないかと思っているのですが、そこを教えていただけますか。

(三上) 文房具の番組は夜の10時から放送して、全国のコミュニティで聴けるのです。やはり電波で流れている野々市や金沢市周辺の方、金沢工業大学の主に学生の方が文房具をたくさん使われると思うので、その方たちを対象に番組を作ろうと思って、金沢工業大学の学生などにアンケートを取っていました。

(質問) 役立つ情報というところで、そこで何を訴えたかったのですか。

(三上) 文房具はたくさんあって、私もたくさん持っているのですが、本当にみんながそれをきちんと活用できているのか、どれをみんな使っているのかを調べて、本当にみんなが必要としている文房具は何なのかを最終的なテーマにしたいと思いました。

(質問) リスナーの方にその思いは届いたと思いますか？

(三上) まだ完璧には届いていないと思います。

(質問) なぜ、まだ届いていないと思いますか。

(三上) 自分はこういう文房具を持っていて、こういう文房具がすごいよと、たくさんの方に伝わるように言っているのですが、やはり説明が長くなってしまうたり、先ほども言ったようにトークを中心にしたところ、今度は重要な部分しか言えなくなってしまった

のです。コミュニケーション能力を身に付けて、多くの方と話すためには、今度はトークだけではなくて説明にも気を付けたいと思っています。

(質問) なぜを5回繰り返すと答えが見えてくると思うのです。自分の思いが伝わらなかったら、常に自分の心に「なぜ」を5回繰り返してやると、何らかの答えが出てくるのではないか。そこがある意味一つ売り込むためのコミュニケーション能力につながるのではないかと思いますので、今後ご参考にしていただければと思います。

(三上) ありがとうございました。

---

工学部ロボティクス学科2年 島 克実



自分がこの大学に来たのは、一つやりたいことがあったからです。それは、人の体の代替になるようなものや、その補助になるものを機械で作るといことです。小学校時代に兄が足の病気になって、松葉づえをついた状態で長い間生活していました。兄が不自由な思いをしているのを間近で見ているのと、兄の足が不自由というだけで、その不自由さを

家族全体で一部共有しなければいけない状態にありました。その松葉づえ生活が終わった後に、今度は中学校時代に自分が左腕をけがしてしまって、1カ月間ギプスを巻いたままで生活することになりました。今度は自分が不自由になって、さらにその不自由さを強く感じました。それで、人の体の代替、補助ができるようなものを作ってみたくて、この大学に来たわけです。

現在は授業に出席したり、いい成績を目指すことは当たり前のこととしてひたすら頑張ってきていい成績を修めたということで、学長褒賞を9個いただきました。しかし、それだけ頑張ったところで、自分に不足しているものは何かに気が付いてきたのです。その一つ目は、チーム活動でまとまりがないとか、やる気がない人がいるということが起こってしまったので、自分にはチーム活動による活動の力が足りていないのだと自分で判断して、それを解決するために夢考房活動に参加しようと考えました。さらに、授業以上の知識は授業を受けていただけでは手に入らないものですので、その知識を求めるために資格取得を始めました。

夢考房活動で自分が大学に入った動機にかかわるプロジェクトがあればいいということで探してみたところ、福祉機器開発プロジェクトが当てはまりました。このプロジェクトは筋電義手という機械で動く義手を作るプロジェクトで、そこの制御班に入って波形処理プログラムやPID制御を今やっています。ここに入ることによって、自分は物づくりにお

けるチームワークはどういうものなのかを学べたと思っています。

しかし、福祉機器開発プロジェクトで制御班をやっている中でプログラミングをやるのですが、難解で分からなくなりました。そこでプログラミングの資格を取ろうと考えたときに、基本的な数学的な知識が必要なものだったので数検2級を取得し、さらに今、プログラミングにかかわる内容の基礎的な知識を手に入れるために、基本情報技術者の資格獲得に現在挑戦中です。さらに、自分がやっていたPICマイコンの仕様書は英語で書いてありました。それで、英語の仕様書を読む力を付けるために工業英検3級を取りました。さらに夢考房活動の中では資料まとめが必ずあります。そのためにMOS資格取得に現在挑戦中です。

現状では筋電義手など人の体を補助するものは、自分が見た限りではそれほど市場が発達しているわけではありません。ですが、それでも頑張ることは、自分が学生であるうちに自分の限界を知っておきたいのと、自分の限界に挑戦してみたいという思いがあったから、今ひたすら勉強や資格取得に頑張っているところです。新しいことには次々と挑戦していった自分の力としていきたいのが現在の自分です。それで今は、インターンシップをやることで経験を得心したいということで、その活動をしている最中です。

## 【質疑応答】

(質問) 島君は物づくりによるチームワークを知ることができたと先ほどおっしゃっていましたが、具体的にどういうものを知ることができましたか。

(島) 具体的にと言うと、夢考房も学生だけで集まってやるものなので、まず学生間できちんとやり合うことを学ばなければいけないし、自分の受け持った仕事はある一定の水準を超えるようにもしなければいけません。また、仕事の割り振り方もきちんと考えなければいけません。個人個人の状況をきちんと見て、その人が勉学で忙しい状況なども考慮して仕事を割り振ることと、与えられた分の仕事は必ずやり遂げて期限までに出すとか、期限に間に合いそうもない場合は、チームリーダーに期限当日ではなく、もっと早い時期に相談した上で、自分もやり遂げることが個人で必要だと思います。

さらにチーム全体でと言うと、期日や納期というものがあります。その期日までにやり遂げなければいけないと考えたときに、ぎりぎりこれぐらいでできるだろうという考えではなくて、十二分な余裕を持ってやり遂げられるようにすることも、一つ大切なことであることを学びました。

私は情報セキュリティに大変関心のある人間です。私はもともと情報技術に触れることが大好きで、高校時代からプログラミングやコンピューターグラフィックに触れてきま

した。そういう中、ある日自分のパソコンがウイルスに感染してしまって、それが友達にも飛び火してしまったのです。どうしてこうなったのか調べていると、ほかの場所でも情報漏えいとか、データの改ざんとかいう事件がいろいろな場所で起きていることを知りました。そこで僕は、情報技術を扱う上ではリスクが伴うものなのだと認識しました。調べ



続けていくうちに次々と知らなかったことが出てきて、これは危険だと問題意識が浮上すると同時に、私の情報セキュリティへの関心が深まってきました。

私はこの大学に入学してソフトウェアの開発技術を勉強する中で、どこでセキュリティのシステムを組み込めばいいのかを学ぶために、二つのプロジェクトに所属しました。一つは「富士通プロジェクト」で、富士通のエンジニアになり切って本格的なシステム開発を行うプロジェクトです。ここで私はウォーターフォール開発、アジャイル開発、テスト駆動型開発といった、さまざまなソフトウェア開発を経験しました。ここで私は実践的なスキルを身に付け、最終的には富士通ソリューションスクエア様の方で成果発表をさせていただきました。

もう一つのプロジェクトは、「地域クラウド・イノベーション・プロジェクト」と言います。このプロジェクトはさまざまな活動を行っているのですが、私はその中でアンドロイドアプリケーションを用いた地域の活性化をテーマに活動させていただいております。このアプリケーションは金沢スマホ・アプリ・コンテストに応募して、委員長特別賞を受賞しました。そのアプリケーションを簡単にご紹介してみたいと思います。

これが既にアプリケーションを起動している画面なのですが、ご覧のように画面にはマップが表示されますが、近隣にあるスポットの情報を集めており、ここでイベント開催者や店舗の経営者などがスポットにつぶやくことができます。そのつぶやきを見て、こんなイベントをやっているのだということを知って、そこを見てみようということで、そこをタップしますと、このスポットの情報を得ることができます。またスポット情報だけでなく、今まで経営者がつぶやいたつぶやきや、ユーザーの方がどんなふうに思っているのかという口コミを見たり、そこへどうやって行けばいいのかいいのかという機能を使うことができます。もしこのアプリケーションが気になった方がいらっしゃれば、ポスターセッションの際に私が立っていますので、お気軽に声をお掛けください。

この二つのプロジェクトをとおして私が得たものは、まず実践的な開発スキルです。また、二つのプロジェクトには意識の高い学生がたくさん集まっていたので、そんな学生たちとのつながりを深く持つことができました。そして何より、ソフトウェアをチームで開発する力が身に付いたと思います。これは自分の作業が遅れてしまうと他人にも迷惑が掛かってしまうとか、作業中の連絡、コミュニケーションを取ることがいかに大事であるか

ということを身に付けましたが、これは社会に出た後も大変役に立つスキルだと思います。

何より私は、一人で高校時代からプログラミングをしてきたのですが、一人でプログラムを作るよりも、チームみんなでアイデアを出し合って開発する方が、断然楽しいことを強く感じました。

私の今後の取り組みとしては、先ほどのアプリケーションは開発途中なのですが、そのアプリケーションをさらにセキュアなものにしていくことが目標になります。これはアプリケーションのセキュリティー部分を私にらせていただいておりますので、ユーザーの情報を守るために暗号化や認証などを組み込んでいこうと思っています。また応用情報技術者試験、情報セキュリティースペシャリスト試験に来年度挑戦するとともに、一般に開かれているIT勉強会やセキュリティーキャンプへ参加して、スキルを磨き続けたいと思っています。

私の将来の目標は、さまざまな企業様に安心して情報技術を使っていただくことと、また企業のサービスを利用される方に安心してサービスを利用していただく仕組みを作ることです。以上で私のご紹介を終わります。

## 【質疑応答】

(質問) CIJネクストの市川と申します。ソフトウェア開発の技術者上がりです。崩れかもしれません。お話を伺っていて、アンドロイドのアプリケーションということで、興味深く聞かせていただきました。由良さんの話を聞いていると、アンドロイドという言葉、ツールを使って作った楽しさ、アプリケーションのアイデアを出したという両方楽しみがあったと思うのですが、由良さんは将来的にアイデアを出してそれを実現するのか、それを具体的に作っていくのか、どちらの方向に進むことを考えていらっしゃいますか。

(由良) 私のスキルのにはエンジニアの方が向いていると自分で感じていますので、そのアイデアを実現する技術者に就きたいと思っています。

(質問) 例えばアンドロイドは米国の技術者が作った技術だよね。それを使いこなす技術と、アンドロイドを作り出す技術と考えることができると思うのです。もう一度聞きます。由良さんはどちらを考えていますか？

(由良) 私はアンドロイドを使う技術を学びたいと思っています。

(質問) ありがとうございます。

---

工学部機械工学科3年 櫻井 瑞穂

私は高校、大学と機械工学について学んできたのですが、それを学ぶことになったきっかけ、学んできたこと、やってきたこと、これからやりたいことについて順番に話していきたいと思っています。



私が機械工学を学ぶきっかけとなったのは、工業高校に見学をしに行ったときに、冷却スターリングクーラーという機械を作っている生徒を見たことです。私はもともと物を作ることは好きだったのですが、機械を作ることになると、せいぜいキットを組み立てるぐらいで、自分で考えてということは思ってもいなかったことだったので、自分とそれほど年

の変わらない普通の高校生が機械を自分たちで作っていることに衝撃を受けて、すごく格好よく思えました。もし自分にこんなことができるのだったらやってみたいと思い、機械工学を学ぶことに決めて、工業高校に入学したのです。

しかし、工業高校に入ってみると、もともと自動車やロボットやPCにすごく詳しい人が多くて、自分が話に付いていけなくて劣等感を感じることもあったり、女子生徒が少なくてクラスの中で浮いてしまうということがあって、機械工学を学んでいくことをやめようかと思った時期もありました。

しかし、高校の研究で懂れていた冷却スターリングエンジンを製作することになり、それとおして私はやはり物づくりが好きなのだと感じて、将来もそういうことにかかわっていきたくて考えました。また、明確な理由がないのでやめてしまって、ほかのことを学びに行くのは逃げてしまうようで嫌だということもあって、大学でも機械工学を学ぶことを決めて、金沢工業大学に進学しました。

大学に入学当初は、自分の中で機械を作るのだということが頭でいっぱいになって、機械を作ることに関する勉強、例えば力学系などの授業についてばかり最初は考えていたのですが、大学の授業はいろいろな授業があるのです。その中で特に私の中で印象に残っているのは、「技術者入門」という技術者の社会の中での立場はどうあるべきかを学ぶ授業とか、プロジェクトデザイン1、2という商品の企画のようなことをする授業です。そのような授業をとおして、今まで私は物を作ることばかりにとらわれていたのですが、物や機械は作るだけではなくて、それを売ったり、さらに社会に役立てていくことまで考えていかなければいけないことに気がきました。

それで私は、物を社会に役立てていったり、お客さまに売ったりするために何をすればいいのかということで、やはり顧客が何を求めているのかを理解すること、あるいは逆に自分が作った物はこういうものなのだというアピールをみんなにできるような能力を付けることが必要なのだと思います。

そこで私は学内インターンシップと呼ばれている庶務課の業務に携わって、人と接するような業務をしたり、マナーシップ研修やリーダーシップ研修をとおして人と意思疎通ができる能力を高めていけるように今は頑張っています。

私は今、就職活動をしている途中なのですが、将来はどのような仕事がしたいかという

と、今まで私が学んできた機械の知識を生かせるような、機械にかかわる仕事ができたらいいなと思っています。また、自分の好きな機械や物づくりを社会に出していける仕事ができたらいいと思っていますので、企業と顧客や社会などの橋渡しになれるようなところに行って、物を社会に役立てる役割を担うような人間になればいいと考えています。

### 【質疑応答】

(質問) 株式会社ニフコの君沢と申します。非常に熱いプレゼンテーションをありがとうございました。物づくりというと、非常に今日本の中で岐路に立っているということで、グローバルにどのように活躍していきたいか。あるいは日本はどうあるべきかを、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

(櫻井) どのように活躍していきたいかについて私が今考えているのは、機械そのものを作り出すよりも、例えばメンテナンスとかサービスエンジニアとか、機械を役立てていくためにサポートできるような人間になればいいと思っています。

物づくりがどうあるべきか・・・。

(質問) 少し難しかったですね。また、ゆっくり後で(笑)。株式会社ニフコの本社は横浜にありますので、もし興味があれば調べてみてください。

(櫻井) ありがとうございます。よろしくお願いします。

---

工学部ロボティクス学科3年 牧本 健太郎

私が今日お話をさせていただく内容は、自分自身の将来の夢と、将来どういった職業に就いてどういった仕事をしたいかについてです。私は人や企業に役立つシステムエンジニアになりたいと考えています。以下、その理由を順序立てて説明していきたいと思います。

私は幼いころからロボットに非常に興味があって、それが一つのきっかけとなって金沢



工業大学工学部ロボティクス学科に入学しました。そして、1年生の後期に私は夢考房プロジェクトという課外活動の一つに参加しました。夢考房プロジェクトと言っても、幾つかプロジェクトが存在するのですが、私はその中でもロボカッププロジェクトに所属をし、自分たちで計画し実際に物の設計や製作、実際に成果発表を行うという活動を経験しました。ロボカップとは自立して動作するロボットを製作し、サッカーを行うという競技です。

私はそこでプログラムを担当し、実際にロボットが見ている情報を得て、どういった行動をさせるかという内容のプログラムを作成しました。実際に1年生のときには、まだブ

プログラムの知識が全然ないので、基礎について勉強し、2年生で実際にロボットに登載するプログラムを作成しました。去年の5月のゴールデンウィークに大阪で日本大会が行われたので、実際にロボットに私が作ったプログラムを登載して出場しました。しかし、私たちのチームは残念ながら予選敗退という結果になってしまいました。

それについて反省をしたときに、プログラムにミスがあったり、ハードウェアの完成が遅かったということが反省点として挙げられました。そういった中で私は、ロボットを製作するに当たっては、ハードウェアとソフトウェアのバランスがやはり重要ではないかと考えました。ハードウェアがいくら良くできていても、ソフトウェアが全然完成していないのであれば、全くもって動かない金属の塊になりますし、ソフトウェアの完成が良くてもハードウェアが全然動かないのであれば何もできないわけです。

大会で実際に負けて悔しい思いをしたことや、実際に反省をチームで話し合っていく中で、先輩や仲間たちのアドバイスがあり、このままではプログラムで挫折し続けてしまう人生になるのではないかと思い、プログラム、ソフトウェアへの強い興味、さらなる探求心が自分の中に湧き上がってきました。

そういうことをきっかけに、最初に戻りますが、人や企業に役立つシステムエンジニアに僕はなりたいと思っています。やはりシステムを作る上では、何かしらの形で人が生活する上に当たり、また企業が実際に仕事を行っていく中の実際の一つのシステムとして組み込んでいけるようなシステムを作っていきたいと私は考えております。

## 【質疑応答】

(質問) CIJネクストの市川です。ソフトウェア技術者崩れです。今、お話を伺って人の役に立つ物づくりをしたいとお話になっていました。人の役に立つシステムを作っていくことが大事だというのはよく分かっていると思いますが、ソフトウェアの技術者は物を作ることや探求心に突っ込んでいくあまり、人の役に立つ物を具体的にどうはぐくんでいくか、自分の中で人の役に立つこととはどういうことかを考えないケースが多いのです。牧本さんは人の役に立つということを、具体的に何か考えたことがありますか。また、そういう教育が本学の中にありますか。

(牧本) 教育の中にあるかと言われても僕はまだ実感が湧いていないのですが、やはり人の役に立つというのは、仕事をする上で、相手方、顧客の人の依頼というか、こういうものを作ってほしいという内容をしっかりと実現できる形で作成をし、実際に企業様の依頼に合わせた形のシステムを作り上げることではないのでしょうか。

(質問) できたら企業の要求するもの、リクエストに沿うのではなくて、多分自分自身の中で人の役に立つものはどういうことなのか考えるときが、いつか必要になると思います。私は大学の物理を出て、システムエンジニアのようなことをやっていましたが、何年かたって今自分が技術者として役に立っているのは、大学でやったテクニカルな教育以上に、いわゆる一般教養になるような文化的な教育が結構役に立ったと思っています。それ

が人とのコミュニケーションに役に立ったり、新しい発想に結び付いたことがままありました。ぜひ、ほかのところにも目を向けるようにしてください。ソフトウェアは楽しいですよ。

(牧本) はい。ありがとうございます。

---

工学部航空システム工学科3年 木村 久幸



私の将来の目標は新しい航空機的设计に携わることです。今日はなぜこのように考えるようになったのかについて述べたいと思います。

私が工学という分野に興味を持つようになったきっかけは、中学の授業でロボットづくりを経験したことです。その授業ではピンポン玉をボールに見立ててサッカーをするロボットを、生徒一人一人が自由に作るという授業でした。その授業で私は、どうしてもっとボールをうまく運べるか、どうしてもっと面白い動きをしてくれるのかを考えながらロボットを作っていく中で、工作や物づくりに楽しさを感じるようになりました。それがきっかけとなって、私は工学というものに興味を持つようになったのです。

最初は工学という広い分野だったのですが、そこから航空という分野に興味を持つきっかけとなったのが、テレビで大学生が人力飛行機を飛ばしているのを見たことです。それまでの私にとって飛行機は、正直なぜ飛んでいるのかもよく分からないようなもので、とても作るという行為と結びつくものではなかったのですが、自分とそう年齢の違わない大学生が自分たちで作った飛行機を飛ばしているのを見て、作るという行為と飛行機がつながるようになりました。これをきっかけに私は航空工学へ興味を持つようになり、また、大学でも航空工学を学びたいと考えて、本学に入学しました。

大学ではもちろん航空工学に関する専門知識についても学んできたのですが、それ以外にも多くのことを学びました。例えばチームでも物を作る楽しさや難しさ、あるいはアイデアが形になる喜びなどです。

これらを学んだ授業の一つに、金属を加工して、ラジコンエンジン用のヒートシンクを作るという授業がありました。スライドの左下にあるような図面をチームでアイデアを出しながら描いていき、最終的に右上にあるような形にしていくまでのプロセスを学ぶという授業です。

この授業をとおして、いろいろなことを学びました。また、大学に入って学んだこととして、物づくりが社会のニーズに応えるということがあります。それまで私は物づくりに

に関して、新しいものを作るとことや、面白いものを作るとことにしか目がいって  
いなかったのですが、大学に入って工学について学んでいく中で、工学には社会が求める  
ニーズに応えるという重要な役割があることに気付かされました。

このようなことを踏まえて、私は大学4年次では、航空機の主翼を軽量化するような構  
造を研究したいと思っています。航空機において軽量化とは燃費の向上につながる大きな  
テーマです。低燃費という社会が求めているテーマを実現するために必要なテーマだと考  
えたので、こういうテーマを4年次の研究として選択しました。

これから1年まだまだ多くのことを学びたいと考えていますが、それらを踏まえて、こ  
れから社会に出ていったときには、社会が求める新しい航空機的设计に携わりたいと考  
えています。

### 【質疑応答】

(質問) 学生さんの話を聞いていると、「チームワーク」と「コミュニケーション」と  
いうキーワードが出てきます。今、木村さんの発表ですごく興味深かったのは「チームで  
やることの難しさ」ということをおっしゃられました。学生さんがそういうことをはつき  
り言われることは非常に珍しくて、その難しさはどのような点が難しかったのか、その難し  
さをどうやって乗り越えたのかを教えていただければありがたいと思います。

(木村) まず難しさを感じた点ですが、先ほどのスライドにあったようなヒートシンク  
を作っていく中で、チームで活動していると、一人で行っているときよりも多くのアイ  
デアが出るのですが、アイデアが多い分だけ、それを一つの形にまとめるという段階で難し  
さを感じました。それをどのように実現したかという点ですが、何が求められているのか  
に注目して、求められているものをより満たせるものは何かを論理的にみんなで議論する  
ことで、一つのアイデアにまとめるようにしました。

---

工学部情報工学科3年 飯島 大地



私は周囲を巻き込み、新しい価値を生み出すことができる人間です。本学はさまざまな  
学科を抱えており、そこにはプロフェッショナルの卵、さまざまな専門知識に明るい学生  
たちがいます。そんな学生たちが共通の目標を持って、一つのことに取り組むことができ  
れば、それはとても大きな力になると思っています。そこで私は情報工学科で学んだ知識  
を生かして、意欲ある学生たちでシステム開発に取り組めればと考え、学内に開発体制を

整え、学生によるシステム開発チームを編成しました。

開発チームでは企画、設計、開発、リリースといったすべての工程を学生主導で行っております。さらに、チーム内に所属する学生のスキルアップや開発するための工数の見積もり、工程管理など、さまざまなプロジェクトの開発に求められるスキームを網羅しています。学生はアルバイトで急にスケジュールが変動したり補講が入ったりと、社会人よりシビアな点があると思っていますので、こういう工程管理、見積もり時間を管理することは大変重要だと思っています。

私は開発チームの代表として、全体のマネジメント等、メンバーの技術的な教育を担当しました。開発チームで取り組んだプロジェクトの第1弾では、就職活動支援システムを富士通株式会社様との連携によって開発しました。こちらのシステムは大学教職員へヒアリングを重ねて、学生の就学状況を総合的に分析して、この学生はプレゼンテーション能力が優れているなどということを見視化して、それをステークホルダーの企業様に発信することで、学生と企業のマッチングを図るというシステムになっております。こちらのシステムは連携先である富士通株式会社様、および本学の情報システムの担当者の方からも高い評価をいただいて、大学が現在、新たに開発するシステムの一部に私たちのアイデアが採用されました。

さらに、開発チームのレベルアップを図るために、開発チームを代表して、北陸日本電気ソフトウェア株式会社様で半年間の長期インターンシップに参加しました。インターンシップでは、パッケージ製品のAndroid端末採用プロジェクトというものに参加をさせていただいて、そこで実際の現場でソフトウェア開発を学ぶことができました。それで、インターンシップで学んだソフトウェア開発技術、またAndroid端末アプリケーションの開発、流通というものを開発チーム全体にフィードバックをして、メンバーのレベルアップを図りました。

現在、取り組んでいるプロジェクト第2弾は、先ほど由良君の方でご紹介があったアプリケーションになります。そちらは設計工程で大学周辺の店舗にヒアリングを行ったり、学生のアンケートを実施して、利用者視点での要件整備を行いました。このシステムの企画は金沢市が主催した「KANAZAWAスマートフォン等アプリコンテスト」で委員長賞を頂くことができました。

このような活動をとおして、マネジメントスキル、そして幅広い流通スキルを磨くことができました。私は今後も積極的にこのような先端のIT技術を学び続けて、それを生かして人々の生活をより豊かなものにしていけるようなシステムを作りたいと考えており、それを実現できる企業様で現在、就職活動を進めております。

## 【質疑応答】

(質問A) 発表ありがとうございます。AT情報研の熊谷と申します。よろしく申し上げます。非常に素晴らしい発表だったと思いますが、プレゼンの最初が、学生主導で開発体

制を整えてというところから始まっているわけですが、開発体制を整えるというのは、外からのトリガーがないとできないと思うのです。そのあたりの入り口のところをもう少しだけ補足説明してもらえないでしょうか。

(飯島) 本学の産学連携プロジェクトに富士通のプロジェクトがありまして、そちらの方で先ほど由良君からご紹介があったと思うのですが、富士通株式会社のエンジニアになり切ってシステムの開発を行うというものです。そちらの方でメンバーが集まりまして、半分は3年生だったので、そのまま就職をしていなくなってしまったのですが、残りのメンバーとそのメンバーの友達、また先ほど説明があった地域クラウド・イノベーション・プロジェクトで集まった新しいメンバーを含めて、現在のチームの体制が整っております。

(質問A) 分かりました。ありがとうございます。頑張ってください。

(質問B) 質問は2度目です。サイバーステーションの福永と申します。よろしくお願ひします。私はちょっとひねくれ者なのです。この中には非常にいい話が盛りだくさんだと思うのですが、私はその中で苦労や問題点を聞きたいのです。マネジメントで苦労したこと、大きくつまづいたこと、問題点、それをどうクリアしてきたのかということをご参考までにお聞かせ願えますか。

(飯島) 1点目は先ほど挙げましたように、スケジュールの管理という面です。富士通株式会社様に2週間の計画を立てて、その成果物を2週間後に出すというフェーズを繰り返すことで進んできたのですが、そちらのフェーズの際の納期を絶対間に合わせないといけないことが大変でした。ですから、アルバイトのシフトが変わった、補講が入ったという理由でスケジュールが変わったときのコミュニケーションの手段を確立させたり、フェーズが終わったときに振り返りを行って、KPT (keep problem try) という、三つの観点でプロジェクトを維持してきました。

もう1点は、意欲があっても技術的に追い付いてこない学生がいたことです。見積もりを行う際にはスキルの均一化を図らないといけないので、そういう学生に対して、どのようにスキルアップを図っていけばいいのかという点でもものすごく苦労しました。意欲はありますので、夏休みに勉強会を開催してみんなで教え合うという形で、全体のスキルアップを図っていきました。以上になります。

(質問B) もう1点いいですか。開発とリリースの間に品質があると思うのですが、そこについてはどうですか。

(飯島) バグの発生件数など、前のデータがないとその品質を測ることができないと思うので、そういう面が少し……。実際にテストを実施して、バグの抽出はしているのですが、品質を測るという部分まではまだ手を付けておりません。今後の課題です。



私の長所は困難に立ち向かい、最後までやり遂げることができる点だと考えています。これからこれを示すエピソードを話していこうと思います。

私は将来、事業や商品の企画や開発をしていきたいと考えており、大学もそれに合わせて選んできました。私がこの心理情報学科に入ろうと思ったきっかけは、心理情報学科で

は人の心の働きという通常とは異なる視点からの製品開発を行うことができることに、魅力を感じたからです。しかし、実際に入学してみると、学科では物づくりということはほとんどなくて、入学前のイメージとのギャップに苦しみました。

そこで私は自分の夢の実現に向けて、PMPというプロジェクトに参加しました。PMPとは心理学的な視点を取り入れて、企業と連携して製品の企画開発を行うプロジェクトです。

3年次はバレンタインデーのパッケージデザインの改善に取り組みました。そこでは心理学的な手法を利用して、売れる製品にはどのような要因があるのかを明らかにして、私たちが考える製品を企業側に提案しました。

提案する前のパッケージは赤色で柄が多く、全体的に派手な印象があるものでした。改善後のものを持ってきたのですが、先ほどとは違い、柄を無くし、ワンポイントのハートだけにして、全体的にシンプルなものに改良しました。

このプロジェクトで毎回問題となったのは、企業と仕事をするための時間的な制約で、決められた日までに成果を上げなければならなかったことです。また、実際にこのプロジェクトの成果を出すための分析を行い始めたのが夏休みの直前だったため、ほかのメンバーにモチベーションの格差がありました。そういうものを解決するために、私はほかのメンバーと連絡を取り合っ、一定の調整や作業の分担を細かく行いました。そして、参加してくれないメンバーに対しては自分から積極的に働き掛けて、参加してくれるように連絡を取るようにしました。

また、難しい作業は自ら進んで行って、ほかのメンバーの負担を極力減らすことで、作業の効率化を図りました。こういうことを夏休み中もずっと続けていたのですが、そうしていく中にメンバーのモチベーションも向上していき、何とか期日までに完成させることができました。この商品自体は8月の提案から生まれたものですが、その後も実際に続いています。

私は現在、就職活動中ということもあって、なかなか空いた時間を見つけることが難しいのです。ほかのメンバーも同様ですが、そうした限られた時間の中でも、一生懸命頑張っ

て取り組み、成果を上げることができた点は誇りに感じています。

このように私は、時間の制約やモチベーションの格差など、さまざまな困難に直面しても柔軟に対応し、最後までやり遂げられることができます。将来はこのような経験を生かして、商品の企画や開発だけでなく、営業という職種で頑張っていきたいと考えています。

### 【質疑応答】

(質問) 先ほど難しいことを一人でやるとおっしゃいましたが、どうして難しいことを一人でやろうと思いましたか。

(水野) 分析はチームメンバーで分担してやる場合もあるのですが、難しい作業は数人で行った方がいい場合があって、メンバーが多くいると逆にまとまらないことがあります。特にこのときは主成分分析という分析を使っているのですが、実際に知らないといけないことがあります。ですから、知っている人を中心にやっていった結果、数人でやったということになります。もちろん一人だけではなく、全体のところはみんなでやっていますが、難しいところは・・・。

---

情報学部心理情報学科3年 西川 雄一郎



私は「行動せずに後悔するよりも、行動して後悔すること」をモットーにして生きています。さまざまなことにチャレンジしてきましたが、今回のこのような自己PRの場も、話を聞いてすぐにチャレンジしてみようと思って参加してみました。

私は高校時代に約3年間、ニュージーランドに留学していました。ニュージーランドに行く前は「外国人ってどんな人だろう」「難しいな」という偏見やイメージをたくさん持っていたのですが、留学して積極的に友達を作って仲良くなりました。しかし、そこにまだ壁を感じていました。その壁が一瞬にしてなくなったのは、本当にくだらないことでした。普通に日本の学生のように女の子の話や「あの子かわいいよね」という話を聞いた瞬間に、僕たちと考えていることは一緒なのだと思って、そこから偏見などがなくなり、サッカーで全国6位になりました。

最初は食文化や言葉、文化の差などに非常に苦しんだのですが、結果的にこのようなことを達成しました。このことから人の心理とはどんなことなのだろう、コミュニケーションとはどのようなのだろうと思い、心理学の学科を探していたのですが、勉強できるのは文系ではなく理系だなどと思いまして、理系である金沢工業大学を選んで心理情報学科に入

りました。

心理情報学科ではカウンセリング心理学と言って、相手が言いたいこと、何を考えているかをうまく引き出す技法を学んだり、コミュニケーション心理学、どうやって人とコミュニケーションを図るかということを中心に学習してきました。そして、コミュニケーション心理学やカウンセリング心理学を学んだのでそれを使いたいと思い、しかも僕は留学経験があるので、英語をもっと使いたいと思い、イングリッシュサークルを立ち上げました。これは今まであったサークルとは違って、アメリカ出身の英語の先生に掛け合って、「参加してほしい。英語で話さないという意味がないんだ」ということを伝えて協力してもらい設立したものです。そこではドイツ人や韓国人など、日本人も含め、さまざまな国の人に参加してもらい、週1回、金曜日のランチタイムに英語だけで話をしています。

そこでは、相手の文化、自分の文化などを知らないで、うまく説明できないことが一番難しいと感じました。例えば、本当に簡単なギャグでも、日本ではやっているギャグをアメリカ人にどう理解してもらおうか。どう砕いて説明するかが非常に難しかったです。

その経験から私はどんどん海外に行き、将来は国や人種に関係なくコミュニケーションを図れる営業として、活躍していきたいと思っています。

## 【質疑応答】

(質問) CIJネクストの市川です。先ほど申し上げましたが、最近の学生さんやシステムエンジニアを目指す方から出てくるキーワードは「物づくり」「チーム」「コミュニケーション」だと聞きます。今の西川さんの発表もコミュニケーションが中心だったと思います。国や人種に関係なくコミュニケーションを図る営業として活躍していきたい。コミュニケーションを取るときに、多分あなたは英語が得意なのでしょうが、英語以外、つまり言語以外に必要なものがあればぜひ教えてください。

(西川) 言語以外に必要なものは、もちろんジェスチャーや言葉も大事なのですが、自分の文化を知ることが大事だと思います。相手と話したときに自分の文化を知らないで、日本はどうなのなど何も話せないのです。例えば僕がニュージーランドに留学していたときに捕鯨問題が出ました。オーストラリアで非常に問題になったのですが、オーストラリアに近いニュージーランドでも、その問題が大きく連日取り上げられていました。そのときにホームステイ先のホームステイマザーに「日本人は捕鯨をどう思って、どういう文化でそういうのを考えてやっているのだ」と聞かれたときに何も答えられなくて、悔しい思いをしました。そのような経験から、自分の文化を知ることが最低限、一番必要なものではないかと考えています。

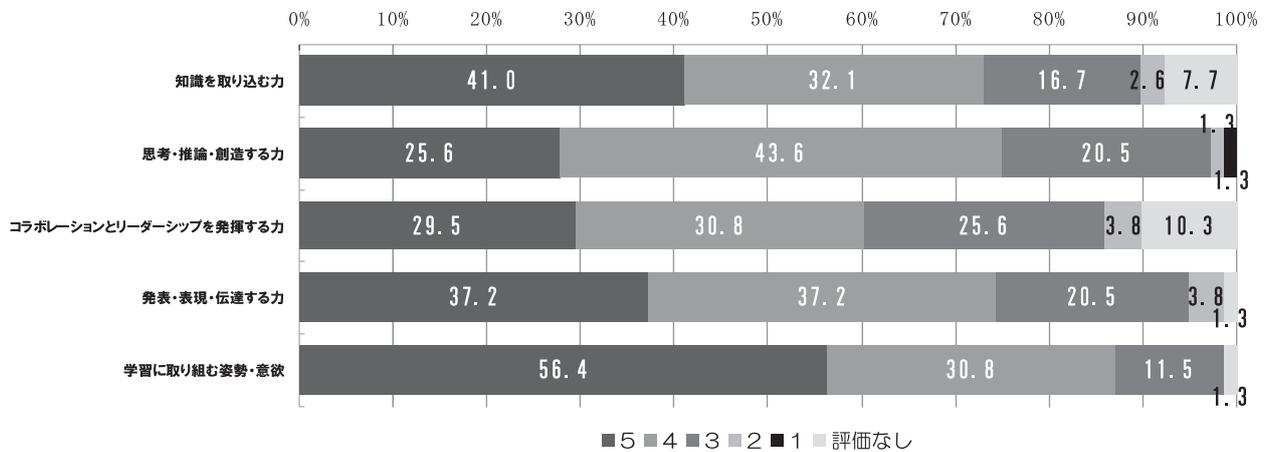
(質問) ありがとうございます。見事な回答です。

## 学生へのフィードバックコメントのまとめ

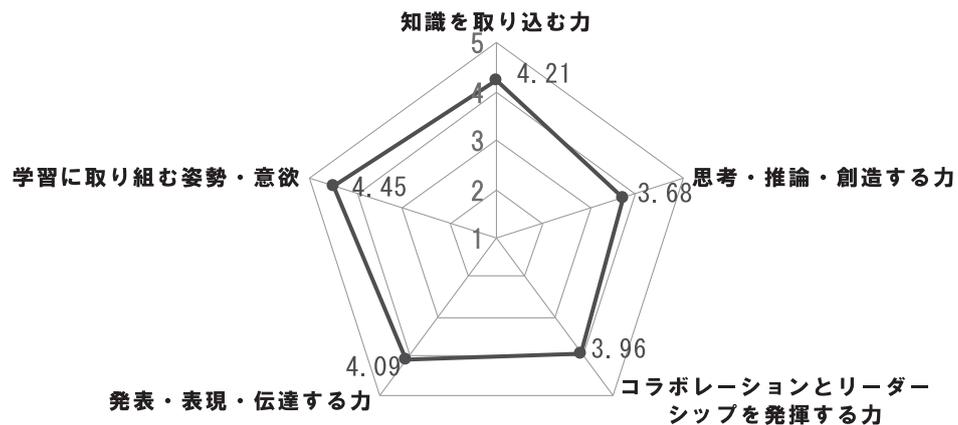
交流会当日、出席したステークホルダー各位にフィードバックコメント用紙を配布し、学生のプレゼンテーションに対する評価およびアドバイスを求めました。評価は、本学が学習支援計画書で定める“総合力指標”に基づく5種類の項目を設定し、1～5の5段階（5が最高、1が最低）で発表の達成度を計るものです。なお評価対象は、任意の学生のみとし、発表内容から判断できない項目については、評価しないよう告知しました。ステークホルダーから頂いた評価件数は78件で、このうち75件が発表を担当した学生、3件がポスターセッションを担当した学生に対するものでした。

ステークホルダー交流会 学生へのフィードバックコメント用紙		発表者番号					
■発表者番号を記入したのち、学生の自己PRに対して、以下の指標に基づいて評価をお願いいたします。							
評価の指標	達成度 (自社で定める人対を“5”として評価してください) ※発表からは評価することができない場合は“N”にチェックしてください。						
知識を取り込む力が備わっているか	5	4	3	2	1	N	
思考・推論・創造する力が備わっているか	5	4	3	2	1	N	
コラボレーションとリーダーシップを 発揮する力が備わっているか	5	4	3	2	1	N	
発表・表現・伝達する力が備わっているか	5	4	3	2	1	N	
学習に取り組む姿勢・意欲が感じられるか	5	4	3	2	1	N	
■学生の成長に対するアドバイスやコメントをお願いいたします。							
■学生に具体的なフィードバックを実施するという点から、よろしければ企業名とお名前をお聞かせください。(任意)							
企業名: _____				お名前: _____			

下図①は、回収した78件の評価を合計し、達成度割合を項目別に示したグラフです。図②では、図①を定量化するため、「評価なし」を除いた項目別の平均値を集計し、レーダーチャートで表しました。



図① 達成度の割合



図② 達成度の平均値

※「評価なし」は除く

## パネルディスカッション

テーマ 「金沢工業大学の教育に対する期待・展望  
～産業連携によるグローバル人材育成に向けて～」

パネリスト 平松産業株式会社 取締役・総務部部长 梅川三樹男氏  
サイバーステーション株式会社 代表取締役社長 福永泰男氏  
株式会社アイグロ 代表取締役 CEO 児玉知浩氏  
金沢工業大学 副学長（産学連携教育担当） 山部昌  
モデレーター 金沢工業大学 産学連携推進部 連携推進室 室長 福田崇之

（福田） 今からパネディスカッションを進めさせていただきたいと思います。

まずは一言ずつ皆さまの会社の概要も含めて、簡単に自己紹介をお願いします。

（福永） サイバーステーション株式会社の福永です。当社は創業して14年目で、石川が本家で東京支店ということで、今、47都道府県にほぼお客さまがいます。主にはソフトウェアのパッケージ、はやりの言葉で言うとクラウドサービスですが、ソフトウェアのレンタルサービスという事業を展開させていただいています。

（梅川） 私どもの企業は能美市の海岸沿いにあり、ナイロンやポリエステル素材を使って、主にスポーツウェアを作っております。しかし、繊維だけではなかなか生き残れないというところもあって、10年ぐらい前からフィルム事業、炭素繊維を使った複合材料、あるいはリチウムイオン電池の負極材を手掛けており、将来は海外展開も考えています。社員は138名です。

（児玉） 私どもはアイグロという会社で、大学生の皆さんをインターンシップという形で受け入れて、私どもの会社が取ってきた営業や販売促進、調査、システム開発など、大学生ができそうな仕事をわれわれの会社の社員がプロマネになって、学生と一緒にやっていくという仕事をしています。その仕事を通じて大学生のスキルアップを図るとともに、大学生の柔軟な発想、行動力、開発力をパッケージにしてわれわれが企業に提供することでお金を頂くということで、Win-Winの関係を作ればということをやっています。



(山部) 私は産学連携担当をしている山部と申します。本学にはもともと学生の進路部がありました。それだけでは学生の成長につながらないということで、1年生から自分のキャリアパス、キャリア形成をやっていながら、最終的には就職に結び付けたいということで、3年ぐらい前からこういう機構で運営しております。

(福田) 私はモデレーターということですが、大学の産学連携や地域連携といった先生方が取り組む教育研究の支援をしている事務スタッフです。

早速ですが、学生のプレゼンとポスターセッションをご覧になっていかがでしたか。

(福永) 西川さんへのコミュニケーション質問に、彼が「文化です」と言ったことに大変感銘を受けました。当社の取引先、業務提携先のサムスンも世界を目指すという中で、世界中に人を送り込んだわけです。3年間の目標の中で文化を学んできなさいと。そういう点で、彼が会話、コミュニケーションに対しての哲学を持っていることについて、僕はすごいなと率直に感じました。

(梅川) 学生の発表力、人柄がプレゼンの中によく出てきたと思います。特に人間力です。簡単に言えば、ヒューマンスキルです。そういうものが非常ににじみ出ているストーリーがある発表だったと思います。われわれは物づくりをやっていっていますが、どうしても自分の視点にこだわり、何かを開発するにしても自己満足で終わってしまいがちなところがあります。作り手側の物づくりの視点と使い手側の視点の擦り合わせをしていくことが必要です。皆さんが顧客の目線も考えられて発表されているところに感銘を受けました。

(児玉) プレゼンテーションをされた学生、ポスターセッションのみに参加された学生、WAVEプロジェクトのメンバーの学生がそれぞれうまく連携して、形になっていたなと感じました。それぞれ個々には、この子すごいな、優秀だなという印象も当然あるのですが、全体的に見て、プレゼンテーションをやる子だけが目立っていたということではなくて、ポスターセッションに出てくる学生もそこできちんとまとめて説明もしていましたし、自ら話し掛けたりしていました。それをきっちり全体に伝えようということで、WAVEプロ



ジェクトのメンバーが時間も気にしながら、うまく取り回しをしていたので、これはすごく素晴らしいことだなというのが印象に残りました。

金沢に居ると、首都圏や特に関西系の学生とコミュニケーションを取ると、かなり臆病になるところも出てくるのかなと思うのです。この前も東京から企業が来て皆さんと接して

もらいましたが、学年問わず、1年生でも三上君も緊張したかもしれませんが、すごくきちんと自分が言いたいことをまじめに真摯に伝えようと。もちろんプレゼンテーションの技術的にはきっちりできていないところもあるのかもしれませんが、きちんと前を向いて一つ一つのことに取り組む姿勢は感じられたし、企業の方も多分そういうところを評価すると思うので、この調子でいってほしいと思いました。

(福田) 若手人材の育成について、企業の方から、自社の新入社員の方や今日のプレゼンをした学生について、何か感じるところがあればお聞かせいただきたいと思います。

(福永) 皆さん自信を持って素晴らしい発表をしておられたと感じています。ただ、もう少し哲学的というか、自分なりの深い思いが必要なのではないかと。皆さんにも職業観というものがあると思います。なぜここに居て、どういう思いで、何のために仕事をしているのという職業観です。自分はこんな思いで、このように具体的に、このような思いで働くという部分をもっと表に出すべきなのではないかと思っています。

それはどんどん変わっていくと思いますが、そういった自分の心に常に目を向けていくことが大事なのではないか。少しきれい過ぎたと感じます。こちらで発信しても共感しなければコミュニケーションになりません。共感を得るためには哲学が必要になる。当然、失敗談もコミュニケーションの大事なところですよ。

(福田) 実際に会社の中で勤めている若手社員にも同じような感じがするわけですか。

(福永) 同じです。職業観がないという子も非常に多いですね。ただただ就職が決まったからうちの会社にいますというところがある。これは人から与えられるものではなくて、自分から作り出すものですから、自分の心に目を向けるのはなかなか難しいと思うのです。そのコアの部分をもっと磨いていっていただきたいと思います。

(梅川) 私の会社で働いている社員には理系もいれば文系もいる、開発チームの中でも農学部もいれば、それこそ経済学部卒の子もいるということで、いろいろな視点で物づくりを進めていこうとしています。アルバイトから「マニュアルがないの」という問い掛けがちよくちよく聞かれるのですが、確かに標準動作をしていけば作業の効率が上がるので、その意味ではマニュアルも大事なのですが、われわれの物づくりでは、なぜを繰り返しながら論理的思考を駆使していく視点が大事なのです。なぜこんなことをしなければならぬか、どういうことでこういう現象が起きるのかという問題の本質は何かを見極める力、それを深掘していく訓練が今の若い人には非常に希薄かなという思いがします。

われわれは現場力という言葉で表すのですが、問題は現場で起きているのです。現場に行かないと分からないことが非常に多いのです。それを机上の空論や知識だけで答えを出

してしまいがちな面が少し見られるのかなと。問題を解決してく本当の力は現場で物を見て、自分で1回やってみて、そこから物事を深掘しながら本当の原因と課題を見つけ出す。こういう作業を経験していくことが非常に大事なのですが、スタートの段階からマニュアルを利用されてしまうと、本当の問題の本質が見えなくなって、お客さんにいろいろな質問をされたり、あるいは開発の途中であきらめてしまったりということになりがちです。

(福田) 従来、そのような教育体制は、ある種OJTといいですか、若い人材であっても先輩の姿を見て育っていきこうというマインドなどもあったのでしょうか、社内の育成という観点ではそのあたりは今、実際どのような感じになっていますか。

(梅川) うちでは理系、文系なく現場に放り出します。まずそこからスタートですね。例えばサービスエンジニアになりたい、営業マンになりたいというものは、現場を見ていないと机上の空論になりがちです。われわれの会社には60を超えた人もいれば、女性も男性もいます。そういう先輩なり同僚が働く姿を見ながら、お互いの気持ちを知るところが非常に大事だと思います。現場でそういう苦労をした上で、積み上げたものが血肉になって、将来、5年10年後に役立つと考えています。

(福田) 児玉さんのところでは企業とのタイアップの中でインターンを実施されています。そこにかかわっている学生さんはどういう学生が多いですか。

(児玉) インターンシップは企業の採用活動の延長線上で2~3日だけ会社に呼んでグループディスカッションやっているとところが結構多いのですが、われわれはそれはインターンシップだとは思っていません。われわれがやっているのは、現場にぶちこむ。販売促進なら量販店の前に立って通信回線を売るとか、企業に電話を掛けまくってソフトウェアを売るとか、非常に泥臭いことを学生に大体2~3カ月ぐらいやってもらいます。

例えば以前、大規模な商業施設でフレッツの回線を売るプロジェクトがありました。ある大学生が、何日も何日も客を呼び込んでも全然客が呼び込まれない。ふと客の流れを見たら、家族連れ、子供連れが多くて、ブースを出していても子供が言うことを聞かないから話を聞かないと。では、来週はポケモンの着ぐるみ借りてきてキッズコーナーを作って、そこで子供を羽交い絞めにしている間にフレッツの回線を獲得しようというアイデアが出てきたのです。実際そのようにしたら、前週比で4~5倍ぐらい回線が取れたのです。

これも結局、現場で思いっきり悩んで大変だという思いから紡ぎだされたアイデアなので、そういうことも短い期間で経験はできると思っています。

(山部) 私も実は企業にいました。新入社員にも伸びる新入社員と伸びない新入社員があって、伸びる新入社員は固定概念を打破しようというモチベーションが非常に強い人で

した。「なぜなぜ5回」と言いますが、なぜ2回ぐらいで終わってしまう学生はなかなか伸びません。ですから、なぜなぜなぜを繰り返せるような教育をぜひやってみたいと思って大学に来ました。そういう意味で今、プロジェクトデザインという科目を本学の柱にしているのですが、これは解がない科目でありまして、それこそなぜなぜなぜと。なぜなぜなぜをやっていくと、結局自分の言葉で、自分の経験でその解決策を見つけていかなければいけない。人から聞いた話は固定概念です。そういう意味で、なぜなぜなぜをやって自分で解を得た後は、自分の言葉で人にプレゼンテーションができるということです。

話は戻りますが、今日の発表は皆さん自分の言葉で自分の経験を語って、自分の泥臭い面が原点になった話で、頭でっかちな話ではなくて非常に良かった。それがあある意味、本学の目指しているところかなと思っています。

(福田) 次に産学連携による人材育成というテーマで話をしていきたいと思います。

企業側にも若手人材育成の機能が必要でしょうし、大学側にもそういう機能が必要である。その機能に大きな違いはないのではないのでしょうか。

(福永) うちの競合先はパナソニック、シャープ、ソニー、沖電気などです。われわれは彼らに打ち勝って業界ナンバーワンを取ろうということで推し進めているところですが、その際かなり尖ったところと、彼らが足りないところの情報をかなり仕入れているわけです。ただ、新しい取り組みについては分からないというところで、少し止まってしまうところはあります。ですから、新しい技術、テクノロジーに対してチャレンジをするという学生がもっと現れてほしいし、逆にそれをもっと後押しするような教育が今後必要なのではないかと思っています。そうでないとアメリカに負けます。

(梅川) 昨年、私どももインターンシップを始めて、2名ないし3名程度ということでお願いをしたら、結果的には他県も含めていろいろな大学から5名の方が来られました。それでインターンシップの中で、なぜこういう仕事をしているのか、この機械の役割は一体何だ、加工のポイントは一体何だというテーマを持って、学生を一人1ポジションで配置をして回しました。そして後で特性要因図を書いて、どういうものが根幹にあるのかを最終日に発表してもらおうという流れのインターンシップをやったのです。

また、事前にインターンシップをする学生の目的、われわれの企業としてのインターンシップに対する考えを擦り合わせる時間がありました。前の週の金曜日にそれを学生とやって、翌週5日間というスケジュールだったのですが、その中での成長は非常に著しく、彼らの持ち得たものは貴重な体験だったと思います。夏の暑い盛りですから、われわれの現場は暑い所にいると四十数度になります。そこに実際に入って手伝ったり、いろいろな質問をしながらやってきたのですが、それをフォローアップする場面があるのかどうか。例えばインターンシップを経験した学生がまた学校に戻って、それを発表したり、自分の体

験を今度は広く発信する。あるいは、そこでいろいろな討議をしていくという場面もあっていいのかなと思います。

(福田) うちの進路でも、インターンシップをどんどん斡旋していくという機能は持っています。ただ、そこには多くの学生がエントリーしてきて、一斉に出ていってしまって、それを1件1件フォローするというマンパワーがなかなか割けない状態もあります。

(山部) まさにそのとおりです。ただ、数はまだまだ少ないのですが、長期のインターンシップを3カ月、あるいは6カ月単位でやってきた学生が戻ってきて、プレゼンをやらせると見違えるほど成長しています。それは、社会とのかかわりを持ったからだだと思います。私は物づくり関係をやっているのですが、社会にかかわる中でお客さんが見えるプレゼンができて、それを研究室の中でやると非常に刺激を受けるのが非常にいいことだと思っています。

10年前ぐらい前の学生に、学生実験というのがありました。その学生が10年たって帰ってきたとき「先生、あの実験は素晴らしい。社会に出て何かにぶつかったときのために用意されている実験だったんだ」ということをよく耳にします。それはいいことなのですが、逆にそれを仕掛けとして、初めからそういう意識を持ってカリキュラムを運営するということが、教員側、学校側としてとても大事なことかと思っています。

(児玉) まず不思議なのが、大学は企業にいい人材を輩出したい。企業は大学からいい人材を採用したいのに、お互いうまくいっていないことです。多分、就職活動の仕組み自体の問題もあると思うのですが、そこは今日は議論を避けた方がいいと思いますので。一方で、いわゆる職業訓練というか社会に出ていくまでに大学生にどういう場をお互いに歩み寄って提供していけばいいのかということだと思うのです。それにはインターンシップは非常にいいと思います。ただ、今のインターンシップは非常に狭義に解釈されすぎていて、結局、企業に5日間来てもらって交通費と弁当代だけ出します、頑張れというインターンもあれば、1日だけ部屋に閉じ込めてグループディスカッションというものもあるのですが、僕はアルバイトもインターンシップになると思っています。

以前、NTTさんの某現場に3年生が20~30人働いていました。結果的にその中から3名ぐらいがNTTに就職しました。後から人事部にフォローしたところ、入社して今、5~6年なのですが、ビッグカメラなどの量販店の現場でしばかれた学生は、フレッツの支店の営業の主任みたいところで統括する立場なのですが、やはり迫力が違うと。やはりそのように鍛えられた学生を採用することが会社の力にもなったというのが、7年ぐらいかけて証明されたのです。しかし、そういうことかなと思いますので、そういう機会は幾らでもあるので、工夫してうまくやれば何とかかなかなと思います。

(福永) うちもそうです。別の大学でアルバイトが来ていました。その彼が今うちのメイン製品のプロジェクトリーダーをやっていて、今、国内だけではなくて海外も飛び回っているぐらいの人材に成長しています。

(山部) 数をたくさん出せばいいという問題ではなくて、品質の問題もあるので、年間10~20名というのが現状なのですが、それを一つのステップにして、どんどん広げていきたいと考えているところです。

(福田) 次に、グローバル化がさらに進む中で、これからどういう人材が求められていくのか、また学生はどのようにスキルを高めていけばいいのかをお話してください。

(福永) 別にグローバル人材を否定するわけではないのですが、今日から飛行機のチケットを取って海外で就職をすれば、グローバル人材になります。「会社をつくって、代表取締役社長という名刺を作れば明日から社長になれますよ」というのと一緒です。要するにやるかやらないか。やった方が得です。サムスンや工大ともいろいろと連携もさせていただきましたが、彼らとビジネス提携をするときも、自然と日本語とよく分からない英語を組み合わせながら、韓国語も混ざった形で会話をしながら、時間をかけながらビジネスをつくってきました。それがグローバル人材と言われれば、そうなのかもしれません。

ただ、一つ大事なものは、相手を知ろうという気持ちです。先ほどもあった文化ですよ。相手を知るという気持ちは夫婦間とも非常に似ていて、相手のことを知りたい。要するに好きな人に対してはどのような人であれ、興味を持つわけですよ。相手は何を食べて、どういう生活をして過ごしているのだろう。仕事においても同様に、相手にどれだけ興味を持つかということ、その文化をどれだけ知るかということが非常に大事なところですよ。

もう一つは、自分たちの文化も発信していけるという人材です。ですから、基本は会話のベースにおいて、言葉がうまい、下手ということではなくて、そういうことに対してチャレンジをする、自分で線を引かないという気持ちです。それと、相手にどれだけ興味を持つかということ。あと、冒頭に申し上げました自分の職業観という部分で自分の心に対して目を向けていくという三つがないと、海外に行っても何もしないで戻ってくるという感じになるのではないですか。なので、別にグローバル人材と言わなくても、チャレンジしてください。チャレンジするのみではないかと思います。

(福田) 梅川も、今日の午前中に県のISICOの関係で、グローバル人材育成のプログラムにお越しになっていらっしゃると思いますが、そのあたりを含めて。

(梅川) 私どもの会社にも中国人の研修生が今、17名、約1割強います。彼らは日本に来て3年間働くわけですが、グローバル人材になり得るかということ、ノーと今の段階で言

わざるを得ません。正直まだそういう実例を私も把握をしていないのです。やはり何をつかみ取るか。日本に来て働く、逆に日本人が海外やいろいろな所に行って働くことに、非常に抵抗があるように思うのです。確かに言葉の壁もあるのですが、一つには自分でいろいろな役柄を持ち得る度量、思いがあるかどうか。金沢工業大学はいろいろな専門を持たれて、いろいろな学生を育てられています。だから、あまりに専門に引きずられないで、広域な部分を学んでほしい。

特にわれわれは10年も20年もたてば、いろいろな役割が出ます。実は私も工学系です。ですから、あまり役柄を決めつけなくて、いろいろな広範囲なものを学び取る。挑戦をする。よくT字型という言葉を使うのですが、深い専門性と幅広い知見が要求されます。

もう一つは、海外に行くと、何事も一人で生活もしていかなければいけないし、職場でコミュニケーションも取らなければならない。そういう中においてPDCAを自分で回せるようでない、挫折をしてしまうのかなと思います。

(児玉) 僕の前職は新日鐵という会社にいたのですが、アメリカのOracleなどいろいろな会社等の提携などの仕事で、結構向こうに行っていました。あと、アメリカから日本に商社と一緒に会社を持ってくる。そこで感じたのは、こいつらも飲めば一緒だなと。お酒飲んで握ってしまえばどうってことないということですね。結局、握れるか握れないかで、握れる手段として英語や、彼らが理解しやすい言語で話してあげることがあくまでも重要というだけで、あとは人間力さえあればどうにでもなることかなと思います。

(福田) 最後に山部先生の方にまとめをお願いします。

(山部) 今日は本当にお忙しい中、貴重なご意見ありがとうございました。われわれにとってこれから大学の生き残りという面で、ますます産学連携をやっていかないといけないと思っています。ただし、こちらからのお願いが大き過ぎるのも困りますので、やはり企業にとってメリットがあるようWin-Winの関係をぜひ構築していきたいと思っていますので、またいろいろな形で支援をお願いできればと思います。今日はどうもありがとうございました。



(了)

## 学外参加者名簿（企業・学校）

	企業・学校名	所属・役職	氏名	所在地
1	株式会社アイグロー	代表取締役CEO	児玉知浩	東京都
2	サイバーステーション株式会社	代表取締役社長	福永泰男	石川県
3	平松産業株式会社	取締役総務部長	梅川三樹男	石川県
4	平松産業株式会社	戦略研究室室長	北野高広	石川県
5	石川県立翠星高等学校	進路指導課 教諭	近岡岳則	石川県
6	石川県立翠星高等学校	生徒	林輝	石川県
7	石川県立翠星高等学校	生徒	原田遼介	石川県
8	石川県立翠星高等学校	生徒	能瀬広大	石川県
9	株式会社 AT 情報研	取締役主席部長	熊谷泰彦	石川県
10	株式会社ニフコ	イノベーションセンター基盤技術開発部 部長代理	君澤敏秀	神奈川県
11	サンコー企画株式会社	専務取締役	浦辺俊行	石川県
12	日本通運株式会社 金沢支店	係長（人事・労務）	井坂貴広	石川県
13	株式会社石野製作所	常務取締役 工場長	小田初義	石川県
14	株式会社石野製作所	総務部	田中哲雄	石川県
15	玉田工業株式会社	管理部 総務課	吉田淳	石川県
16	玉田工業株式会社	技術本部 技術・開発課	平林優己	石川県
17	米沢電気工事株式会社	総務部 人材開発課長	安田賢弥	石川県
18	株式会社 OSCAR	取締役 管理本部長	藤谷弦一郎	富山県
19	白岩工業株式会社	取締役 企画部長	白岩丈和	東京都
20	東京コンピュータサービス株式会社 北陸支社 金沢支店	システム部 主任	松井隆明	石川県
21	東京コンピュータサービス株式会社 北陸支社 金沢支店	システム部	吉田優子	石川県
22	みずほ工業株式会社		二村一平	石川県
23	株式会社日立 ICTビジネスサービス	総務部	延山智賀子	神奈川県
24	株式会社アクトリー	管理グループ 総務経理室	江田泰典	石川県
25	三和ハイドロテック株式会社	総務部 部長	水野健	大阪府
26	三和ハイドロテック株式会社	総務部	三戸田欣也	大阪府
27	株式会社 C I J ネクスト	執行役員 リーショナルビジネス事業部 事業部長 兼 北陸支社 支社長	市川香	東京都
28	ロック技研工業株式会社	代表取締役	岩永淳一	千葉県
29	株式会社金沢舗道	代表取締役社長	向井健夫	石川県
30	株式会社マルセイ	専務取締役	中村圭介	石川県
31	財団法人石川県産業創出支援機構	産業振興部 人材支援課	上原猛	石川県

事業名称:平成 22 年度 文部科学省

大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム

取組名称:学生の成長支援型 IR システムの構築

